



## 政治がわかる！せとけん政治塾 ②

# なぜクリスチャンとして 政治に関わるのか

なぜクリスチャンとして政治に関わるのか？ というお題を今回は頂きました。まさにアメリカ合衆国が建国された経緯もいわゆるピューリタンと呼ばれる人々がキリスト教信仰の自由を求めてアメリカ大陸に渡り、建国の父祖たちが、彼らの信仰の岩の上に国を建てたという歴史が共有されていますが、アメリカのデモクラシーの根底にはキリスト教としての信仰が根差していると言っ



て過言ではありません。

そんな国情の中で、クリスチャンとして政治に関わることは至極当然のことですが、クリスチャン人口がたった1%と言われる日本では、キリスト者としての常識も聖書信仰も通じない世界で、クリスチャンが政治に関わることは困難だと皆さんは思うでしょう。しかし、WWJD? (What Would Jesus Do?) イエス様ならど



### 瀬戸健一郎

英国エセックス大学政治理論修士課程修了／獨協大学法学部卒／衆議院議員山川ゆりこ（妻）事務所長／日本マルタ友好協会会長／日本CBMC副理事長／元・草加市議会議員（6期）～議員団長、議長、監査委員、全国市議会議長会評議員等歴任／1980年に米聖公会で受洗／草加神召キリスト教会所属／信仰と学問的知識及び政治経験を活かし、日本の政治に違いをつくる活動を展開中。



な状態なので、あらゆる事物に対する判断基準が存在しません。現実にはただ流されて、さまざまだけです。これを哲学的に解決しようとしても、永遠に論争を繰り返すことにならないだけで、納得のいく解決には到達しないのです。

## 判断基準を与える聖書

うするだろう」という問題意識でこの世の政治に携わることはとても大事なことなんです。なぜなら、そのような自問自答のような祈りの中で、ある時、瞬時に、鮮烈に、答えが与えられる経験を私たちクリスチャンはするからです。

ドイツの哲学者ヘーゲルは、「すべての事物はそれ自体において矛盾している」と述べています。

「あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから『これが道だ。これに歩め』と言うことばを聞く。」(イザヤ三〇・21)

そして、この世は、もしも信仰が無ければ、カオス(混沌)のよう

矛盾するとは、どちらかが正しくて、どちらかが間違っているの、「すべてがそれ自体矛盾している」というこのヘーゲルの矛盾論は二律背反のように聞こえて、今でも、世界中で論じられている難しいテーマです。しかし、私たちクリスチャンにとつては、そもそも聖書の世界観が、「天と地」、「善と悪」、「光と闇」、「天国と地獄」、「天使と悪魔」、「聖

霊と悪霊」などといった、お互いが相容れない「事物」や考え方をはじめるから想定しているの、「この世は矛盾だらけ」だということが、既に織り込み済みだというわけです。

ヘーゲルの言う「矛盾」は、英語にすると「Contradictory」という訳語が当てられるのですが、それは「正反対の」とか「対照的な」というニュアンスを含んでいます。聖書に描かれている上記のような「矛盾」の例に限って言えば、私たちはそれらのどちらが「正解」か、簡単に判断できません。ヘーゲルの矛盾論は「選択」の問題ではなく、矛盾する一対のものの方や考え方が結果

的にひとつの事物に集約される。極論を述べれば、「同じものでも異なる見え方をするもの」だと言っているにすぎません。しかし、それではあらゆる「事物」をいかに表現し、その存在を言い表したとしても、その「事物」を動かす力はありません。

つまり、「矛盾」する「事物」の善悪や正否を判断する基準を、ヘーゲルは与えてくれません。一方、聖書はその判断基準を明確に記しているの、聖書の価値観を尺度に「政治」に関わることで、クリスチャンがこの世の「地の塩」、「世の光」として世界を変える「力」を得ることになります。

## クリスチャンが政治に関わる理由

さて、二つ以上の異なる価値観が同時に同じ空間に存在する時、「政治」が発生します。十人十色の価値



観がせめぎ合う人間社会では様々な「矛盾」が発生し、その「矛盾」が「緊張」を生み出し、「緊張」が「葛藤」を生み出す。それらを調整し、「事物」を前に進める働きを「政治」というのです。その時、聖書信仰に立つて

事物を判断し、調整し、前に進めるクリスチャン政治家が政治に関わることは、「この地に御国をきたらせたまえ」という祈りと行動を一致させる働きを生み出します。これがクリスチャンとして、政治に関わるべき理由です。

聖書を知らず、聖書の価値観を知らず、神様を知らずにこの世を生きる人々には、上述した聖書的な区別が明確でないで、彼らの前に「矛盾」も「緊張」も「葛藤」も生じません。逆にクリスチャンとして政治の世界に飛び込むと、この世的な価値観や事物と信仰との緊張や葛藤に自ら身を投じることになるので、出来れば、避けて通った方が平和で

しょうし、賢明な判断なのかもしれません。

しかし、クリスチャン・ライフも政治も、結局、この世では同じ試練を神様から与えられることになり、修道院に籠こもって、この世と出ての人生は素晴らしいことです。しかし、多くのキリスト者たちはこの世に遣わされ、それぞれに使命が与えられ、日々この世との緊張と葛藤の中で生かされているわけです。

ですから、この世が最も凝縮された政治の世界で働く使命や選択肢が、クリスチャン・ライフの延長線上には起こり得るわけです。そして、政治の世界での試練の厳しさとクリスチャン・ライフにおける試練の厳しさに、私は何の違いも感じたことがありません。むしろ、日常的に自分の周りの人々の暮らしのお困りごとや様々な社会問題に直面すること

で、ある意味、献身された教職者の先生方と同様にこの世のあらゆる問題に立ち向かう機会を得るので、ますます上からの知恵と啓示の御霊が必要になって、強められます。そして、益々多くの主にある兄弟たちの祈りに支えられて、私たち夫妻の政治活動は守られています。

## 世と向き合い 生きるのが政治

聖書信仰に立つということは、肉的でサタンの価値観や事物にあふれるこの世において、神様の御心を知り、神様の聖霊に満たされて生きるクリスチャン・ライフに明確な「区別」を与えてくれるので、この世との葛藤がすべてのクリスチャンの信仰生活を「政治化」します。この世においては、クリスチャン・ライフそのものが「政治」なのです。そもそも聖書を知らない九九%の日

本人は、聖書が説く世界とこの世の矛盾や葛藤さえも認識することはありません。そして彼らは、この世の価値観に迎合あひうしてさえいけば、ただ流されて生きてさえいけば、その人の人生に、信仰的な矛盾や葛藤は生じませんから、政治とは無縁の「楽な人生」を生きる事ができるので

す。しかし、クリスチャン・ライフがこの世でイエス様の身丈をめざす「成長」と神の御国の前進を願う「祈り」を基盤としているならば、「この世とどう向き合っていくべきか」と考えることから逃れることは出来ません。言い換えれば、クリスチャンがこの世と向き合い、生きる事が政治であり、それに関わることは主からの使命だと私は感じてきました。そして、政治というのは矛盾だらけのこの世を「治める」働きですから、例えばそこで働く政治家たち

が、神様を知らず、聖霊の導きを受けていないとしたら、彼らは一体、何を自分たちの善悪の基準にするのでしょうか？ 矛盾にあふれた世界は、ますます一筋の光を見失い、カオス（混沌）が一層この世には蔓延していくでしょう。

かつてバブル期と呼ばれた時代に、好景気な飲食店から多額の「みかじめ料」と呼ばれる上納金を集めていた暴力団が、暴対法（暴力団による不当行為の防止等に関する法律）が強化されて資金源を失い、公共工事現場で「ベンツが傷ついた」

などと言いがかりをつけて工事業者を恐喝し続けていた事件が発覚しました。事件の取り調べのために、市役所に家宅捜索が入るなどして明らかになったことは、その暴力団組長が、工事現場から市長の携帯電話に電話を掛け、「弁償しないなら、市長に言つて、指名停止（仕事をさせない）にするぞ」と工事業者を脅し

ていたことが分かりました。

この一連の事件で、反社会的勢力である暴力団に対する毅然たる態度と、暴力団に身をやつした一人の人間に対する愛がどのように両立するか、という課題に直面する経験をしました。国防色の街宣車が大音量で私の自宅、事務所、事業所の周辺を巡り、怖い思いもしましたが、不思議と守られました。

## クリスチャン政治家の使命

暴力団組長と携帯電話で繋がり、結果的に工事業者への恐喝事件を助長していた市長は、不信任決議を受けて議会を解散。改選後の市議会が不信任再議決したことによって市長が失職する結末になりました。この間、暴力団に毅然と対応できなかった市長の人間の弱さに哀れみを感じながらも、不正を糾す毅然とした態度が求められました。ここにも

神様の愛を忘れることはありませんでした。

この一連の事件に遭遇して、クリスチャンとして、人を愛しつつ、神様の目線で為すべきことを為す厳しさを学びました。次の御言葉を市議会本会議の冒頭で述べたことは今でも鮮烈な証しであったと回想しています。

「あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。」

（マタイ15:13-14）

クリスチャン政治家としての使命は、「御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。」（マタイ6:10）という主の祈りを実践することであり、そのために次の祈りによって、

人と事物に当たることだと思います。「どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように」（エペソ1:17）。政治は神様が下さる「知恵と啓示の御霊」なしにできる仕事ではありません。クリスチャンであっても、「己が力」で何事も進めようとすれば、神様からの知恵と啓示の御霊は与えられないでしょう。神様に従順でへり下ったクリスチャン政治家がもっと多く日本にも起こされますように！

祈りつつ



市議会本会議の質問の動画